

1. 群集の概念と言説の権力

本論の主題は1920年代—とくにその前半—にドイツとオーストリアで成立した群集心理学と群集論の特異性を明らかにすることである。この探求にあたって私たちがまず考慮しなければならないのは、非歴史的かつグローバルな群集概念、言い換えれば、普遍的な群集概念から出発することはできないということである。なぜなら、近代の群集論の歴史的検討を通して最初に明らかになるのは、価値中立的で、歴史的・政治的・社会的なコンテキストから切り離しうるような「群集」(Masse)の概念は存在しないという事実だからである。¹したがって、私たちは、まず「群集」²という概念の出自をドイツ語の概念史のなかで確認し、さらにMasseという語に語源的に含意されており、近代の群集論のなかで様々に展開されることになる意味連関を確認することから考察を始める必要がある。

Masse という単語自体については、すでに近代以前に多くの用例が見いだされるが³、社会的・政治的な意味(「群集」)でMasseという概念が最初にドイツ語に導入されたのは、1793年、フリードリヒ・ゲンツ(Friedrich Gentz)によるエドマンド・バークの著作『フランス革命の省察』の翻訳においてだとされる。⁴ゲンツによって、英語のcrowdが、フランス革命のなかで起こった国民総動員(levée en masse)に由来する語Masseによって翻訳されたのである。

ドイツ語における群集概念のこの出自からは、その後の群集論の展開を考える上で二つの重要な示唆を得ることができる。ひとつは、近代的な群集概念が、革命と、革命において街路を埋め尽くし、監獄を襲撃し、権力を打破するべく結集する群集、すなわち革命的群集とに、切り離しが

¹ Vgl. Annette Graczyk: Die Masse als Erzählproblem unter besonderer Berücksichtigung von Carl Sternheims »Europa« und Franz Jungs »Proletarier«. Tübingen (Niemeyer), 1993, S. 5ff.

² 周知のように、ドイツ語には特定の場所に集まった大勢の人間たちを指す言葉としてMengeとMasseという二つの語があり、ドイツ語で書かれた群集論のほとんどは両者を厳密に概念的に区別している。本論では混同の危険を承知の上で、『大辞林 第二版』(三省堂)における定義を考慮し、一貫してMasseを「群集」(「社会学・心理学では、共通の関心と目的のもとに(不特定多数の人間が)一時的・非組織的に集合した集団で、日常の行動規範からはずれた行動をとりやすいものをいう。)」と訳し、Mengeを「群衆」(「むらがり集まった多くの人々。)」と訳すことにする。

³ Vgl. „Masse“ In: Deutsches Wörterbuch von Jakob Grimm u. Peter Grimm. Zwölfter Band 1. Abteilung. Leipzig (Verlag von S. Hirzel), 1956, S. 1708-1710.

⁴ Vgl. E. Pankoke: „Masse Massen“. In: Historisches Wörterbuch der Philosophie, hrsg. von Joachim Ritter u. Karlfried Gründer. Basel Stuttgart (Schwabe & Co AG.), 1980, S. 828.

たく結びついているということである。事実、群集論の歴史は革命の歴史と切り離せない。フランスで群集心理学を創始したギュスターヴ・ル・ボンの著作の背景に、1871年のパリ・コミューンにおける革命的群集の体験があることは良く知られているが⁵、本論が分析するパウル・ティリヒ、テオドール・ガイガー、パウル・フェーデルンなどの学者や作家たちの考察にとっても、ドイツ革命の日々に出現した群集の体験は決定的な意味を持っていた。また、カネッティも『耳の中の炬火』のなかで、1927年7月15日に体験した「革命に最も近い」群集体験が『群集と権力』の発想の源泉にあることを明かしている。⁶それにたいして、ヴィルヘルム・ライヒやヘルマン・ブロッホの群集心理学は、ナチズムによる「反革命」における群集の行動を説明する理論として構想されたのだった。

群集という概念がもとをたどればエドマンド・バークのフランス革命についての論争的な書物の翻訳に由来するという事情はまた、群集という現象がドイツにおいて、最初から論争の対象として言説化されていたということ、そして、群集概念が、特定の政治的立場のもとで社会を分析する言説と結びついた「社会批判的カテゴリー」⁷であったということの意味している。群集との遭遇が群集論の背後にあるのと同様に、言説から切り離された「群集なるもの」もまた存在しない。群集とは客観的に規定されるような事実(Tatsache)ではなく、人々のあいだの社会的な諸関係の結節点を構成するような問題(Streitsache)だったのである。

つぎに語源的にみると、Masse という語は「パン生地」や「こねること」を意味するギリシア語(μάζα, μάσσειν)に由来するとされる。⁸それらの語が指し示すのは、自立的な生や活動性の不在、内発的に自己を形作る力の欠如などによって特徴づけられる事象である。⁹したがって、「群集」には語源的に、形を欠いたもの、外部からの力の作用がなければ形を得ることの出来ぬもの、という意味が含まれているといえる。この受動性あるいは客体性ゆえに、「群集はほとんどつねに、そのイニシアチブのもとで群集が支配されることになる能動的な質—指導者層やエリート—との関係において観察される」¹⁰ことになる。群集を思考することは、群集に形を与える権力を思考することと

⁵ Vgl. Alice Widener: Introduction. In: Gustave Le Bon. The Man and His Works. Indianapolis (Liberty Press), 1979, S. 27-28.

⁶ Vgl. Elias Canetti: Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921-1931. München u. Wien (Carl Hanser Verlag), 1980, S. 274-282.

⁷ Vgl. E. Pankoke, a.a.O., S.828.

⁸ Vgl. Johannes Chr. Papalekas: „Masse“ in: Handwörterbuch der Sozialwissenschaften, hrgs. von E. Beckerath u.a., Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) u.a., 1961, S. 220. u. Peter Friedrich: Die Rebellion der Masse im Textsystem. Die Sprache der Gegenwissenschaft in Elias Canettis „Masse und Macht“. München (Wilhelm Fink Verlag), 1999, S. 292-309.

⁹ フランス語の foule や英語の crowd も、微妙にニュアンスは異なるものの、語源的にはほぼ同様の事象を指している。Vgl. Johannes Chr. Papalekas: a.a.O., S. 220.

¹⁰ Johannes Chr. Papalekas: a.a.O., S. 221.

切り離し得ない。このような意味連関のうちに、私たちは、群集論において様々な形で展開されることになる群集と権力との関係のいわば語源的基礎とでも呼ぶべきものをみることができる。

ドイツ語の群集概念の出自の確認とその語源的な意味連関の検討によって、私たちは、一方では群集と群集論との解きほぐしがたい絡まり合いを、他方では群集と権力との密接な関係を見いだした。しかし、この二つの関係を重ね合わせるとき、さらに第三の関係が視界に浮上する。つまり、群集論と権力との関係である。群集を思考すること、すなわち、それを描写し、分析し、分類することは、形を欠いたものに形を与え、運動し、流動し続けるものを押しとどめ、客体化することである。つまり、群集を思考することは、言説の力によってそれを支配することに通じているのである。このことは群集の言説化そのものに関わっており、したがってドイツ語で書かれた群集論にのみ妥当するわけではない。近代の多くの群集論は、まさに権力者—指導者層やエリート—のポジションとの同一化にもとづく危機の言説であった。とりわけ、エリート主義的とも貴族主義的とも形容されるル・ボンの群集心理学は、この点において「古典的」であり、ル・ボンの文化批判的パースペクティヴはドイツにおいてもシュペングラーやヤスパースに受け継がれている。したがって、冒頭で提起された問い、すなわち、1920年代前半のドイツとオーストリアにおける群集心理学と群集論の特異性は何かという問いに答えることは、群集・権力・言説の三重の関係を考慮しつつ、第一次世界大戦とドイツ革命後に試みられた「古典的」群集心理学のラディカルな読みかえを明らかにすることにほかならない。本論はこのためにまず「古典的」群集心理学の特徴を確認し、つぎに1920年代における群集論と群集心理学をそれぞれ考察する。

2. 「古典的」群集心理学—ル・ボンとタルド

1920年代のドイツ語圏で展開した群集をめぐる言説の枠組みを決定的に規定したのは、ル・ボンによって定式化された二組の対概念であった。そのうちのひとつは個人と群集であり、もうひとつは群集と指導者である。したがって、ここではこの二つの対概念に限定してル・ボンの理論を考察することにしたい。

個人と群集との対立は、もちろんル・ボンが最初に指摘した事柄ではなく、むしろル・ボン以前のものも含めてあらゆる群集論に共通する要素である。¹¹しかし、ル・ボンは群集(Masse)を単なる個人の寄せ集めとしての群衆(Menge)から厳密に区別することによって、個人と群集との対立を極限にまで押し進めた。いまや個人と群集の間にはいかなる共通性もないとされるのである。「ある特定の状況、しかもただこの状況のもとでのみ、人間の集団はそれを構成する各個人の性

¹¹ Vgl. Annette Graczyk: a.a.O.. S. 6ff.

質とは異なる、新たな性質を持つ」。¹²この特定の条件とは、外部からの刺激や影響によって人々の感情や思考がただひとつの方向に導かれることであり、そのとき単なる個人の総和とは異なる「単一の存在」として「心理的群集」が成立する。そして、この心理的群集の集団的な心 (*âme collective*) は、個人の心を律する諸法則とは異なる「群集の心的統一の法則」にしたがうとされる。この心的統一のもと、各個人の社会的出自や教養などの差異はすべて意味を失い、群集化した諸個人は一人にいるときとはまったく異なる仕方考え、感じ、行動することになるのである。¹³したがって、このような個人の変容がいかんして起こるのかを解明することが、群集心理学の中心的な課題のひとつとなる。1920年代の群集論において、ル・ボンがこの点に関して行った説明(とりわけ暗示や伝染の概念)はしばしば批判されることになるが、にもかかわらず群集心理学による個人と群集の対置はその絶大な影響力を失わなかった。その理由は、そのような群集心理学の概念布置が、群集を労働者階級と定義するマルクス主義的な群集論には含まれていなかった群集体験の理論的考察のための枠組みを提供したからである。

ル・ボンはまた、上述の群集化のプロセスの考察において、後に非常に大きな影響力を及ぼすことになる指導者 (*Führer*) と群集との関係の理論的なモデルを提出した。「入念な観察はつぎのことを証明するように思われる。すなわち、活動している群集の内奥にしばらく身を沈めた個人は、一群集から発する放射のためか、それとも他の未知の原因によるのか—やがて特殊な状態に、催眠術師の掌中にある技術者の幻惑状態に非常に似た状態に陥るのである」。¹⁴群集化した諸個人がいわば集団的な催眠状態に陥るならば、どこかに催眠暗示をかける存在がなければならない。つまり、指導者と群集との関係を催眠術のモデルによって説明する可能性が、この一節では示唆されている。さらにそのモデルは、群集と指導者を切り離しがたいものとしても提示する。しかし、奇妙なことに、ル・ボン自身は、群集の指導者を論じた章において、このモデルを理論化するかわりに、群集の曖昧な「本能」を持ち出すことで満足してしまった。¹⁵それにたいして、1920年代のいくつかの重要な群集論は、この示唆を見逃さなかった。後に考察するように、それらの群集論は、ル・ボンが示唆した群集体験の催眠術モデルを転倒することから、群集体験と指導者の問題

¹² Gustave Le Bon: *Psychologie des foule*. Paris (Press Univeritaires du Paris), 1947, S. 19. ドイツ語訳は Gustave Le Bon: *Psychologie der Massen*. Autorisierte Übersetzung von Rudolf Marx. Stuttgart (Kröner), 1982 を用いた。頁数は原則としてフランス語版に依拠し、ドイツ語訳の頁数を付記する。また、訳出にあたって、『群衆心理』(櫻井成夫訳、講談社学芸文庫)を参照したが、一部訳文を変更している。

¹³ Vgl. Gustave Le Bon: a.a.O., S. 19 u. S. 21. ドイツ語訳 S. 10 u. S. 13.

¹⁴ Gustave Le Bon: a.a.O., S. 24. ドイツ語訳 S. 16.

¹⁵ Vgl. Gustave Le Bon: a.a.O., S. 80. ドイツ語訳 S. 85.

についての新たな考察を導き出しているのである。

群集化した個人について述べたル・ボンの一節は、群集を支配する指導者の役割を示唆するだけではなく、同時に、群集の主体性を否定している点でも重要である。ル・ボンは、『群集心理』のいくつかの箇所で、群集を客体的なものとして特徴づけている。群集の一員となった個人についてル・ボンはつぎのように書く。「個人はもはや彼自身ではなく、自分の意志をもって自分を導く力のなくなった自動人形である」。¹⁶そして、これら群集化した個人からなる群集もまた、行動の主体とみなすことはできない。なぜなら、群集がいかにか活発に活動するとしても、それは決して行動(Aktion)ではなく、反応(Reaktion)にすぎないからである。「外界のあらゆる刺激に翻弄される群集は、その不断の変化を反映する。そこで群集は受け取った衝撃の奴隷となる」。¹⁷この群集の客体的性格もまた、指導者の問題とともに1920年代の群集論の主要な争点となった。

私たちはすでに群集と言説と権力とのあいだの密接な関係を指摘したが、ル・ボンの群集心理学はその古典的な例証である。ル・ボンにとって群集心理学は厳密な科学であると同時に実践的なハンドブックでもあった。初版への序文でル・ボンは、「私は群集という難しい問題を厳密に学問的な仕方で、つまり、方法論的に、かつ意見や理論やドグマにとらわれることなく扱おうと試みた」¹⁸と書いているが、他方では「群集の心理についての知識は今日、群集を支配するというのではなく—それはあまりにも困難になってしまった—せめてあまりにはなはだしく群集に支配されまいと望む政治家にとって頼みの綱である」¹⁹と述べ、群集心理学の実用性を強調している。ル・ボンにとって、そこには矛盾はない。なぜなら、セルジュ・モスコヴィツィンが指摘したように²⁰、群集心理学の探求(Was ist die Masse?)は、「なぜ」という問いと「どうすべきか」という二つの問いからなり、前者の問いに答えること(群集を認識すること)が後者の問いの解決(群集をコントロールする術を見いだすこと)を可能にするはずだとされているからである。群集の認識は、ル・ボンの著作において、つねに群集を統御する試みと結びついている。

1920年代の群集論や群集心理学を概観するとき、一見ガブリエル・タルドの影響はほとんど存在しないように見える。しかし、もともとル・ボンに暗示と催眠術の仮説にもとづいて群集を考察す

¹⁶ Gustave Le Bon: a.a.O., S. 24. ドイツ語訳 S. 17.

¹⁷ Gustave Le Bon: a.a.O., S. 27. ドイツ語訳 S. 19.

¹⁸ Gustave Le Bon: Psychologie der Massen. S. XXXIX.

¹⁹ Gustave Le Bon: Psychologie des foule. S. 15. ドイツ語訳 S.6.

²⁰ Vgl. Serge Moscovici: Zeitlater der Massen. Eine historische Abhandlung über die Massenpsychologie. Vom Verfasser autorisierte Übersetzung von Michael Sommer. München Wien (Carl Hanser Verlag), 1984, S.45-46.

る示唆を与えたのは、タルドの模倣の理論であった。²¹そして、ル・ボンの『群集心理学』の6年後に出版された『世論と群集』でタルドが導入した二つの概念的区分は、ドイツとオーストリアで生み出された群集についての言説を特徴づけるのに有効な概念装置を提供している。

まず第一に、タルドは群集(*foule*)と公衆(*public*)を区別する。群集が「身体的接触によって生まれた本質的に心理的な伝染の束」として、周密さと近さを前提し、つねに限られた空間を占めるのにたいして、公衆とは「純粹に精神的な集団」であり、「物理的には分離していて、心的にのみ結合しているような個人たちの散乱分布(*Dissémination*)」である。²²つまり、群集が街頭や広場に出現し、集団で行動するとしたら、公衆はいわば不可視であり、つねに社会空間全体に拡散し、新聞に代表されるメディア技術の媒介によって純粹に心的に構成される集団だといえる。共通の思考と感情に支配されるという点では群集と公衆は似ているが、そのような状態が生み出されるメカニズムは全く異なっている。タルドはそのことを「アクチュアリティ」の機能分析によって見事に示している。群集が眼前の出来事と周囲の人間の動きに直接に影響され、暗示を受け取るのにたいして、アクチュアルなニュースがその受け手におよぼす距離を介した暗示の核心は、その同じ情報が数百、数千万の人間によって同時に享受されているという幻想にある。²³タルドは公衆の概念によって、ル・ボンの理論においてつねに混同されていた情動的な集合体と複雑な社会的メカニズムの所産として生み出される集団とを区別するとともに、群集論にメディアと技術の問題を導入した。²⁴群集が歴史上つねに存在したのにたいして、公衆は「印刷、鉄道、電信」の発達によって開花することのできた新たな現象である。それゆえ、タルドはみずからの同時代を群集ではなく、「公衆の時代」と呼ぶことになる。²⁵

タルドが導入した第二の区別は、群集(*foule*)と組織集団(*corporation*)とのあいだのそれである。ル・ボンは群集をそれを構成する要素の異質性と同質性という基準で分類したが²⁶、タルドは組織性の度合いによる分類を提案する。それによれば、一時的で、無定形で、階層秩序を欠いた群集の対極には、組織化され、階層秩序をもち、恒常性を獲得した組織集団がある。前者の代表が革命時に出現する群集だとすれば、後者の代表は修道院、工場、軍隊であり、その「もっとも広大な

²¹ Vgl. Gabriel Tarde: Die Gesetze der Nachahmung. Übersetzt von Jadja Wolf. Frankfurt (Suhrkamp), 2003.

²² Gabriel Tarde: L'opinion et la foule. Paris (Librairie Félix Alcan), 1922, S. 2. 訳出にあたって、『世論と群集 (新装版)』(稲葉三千男訳、未来社)を参照したが、一部訳文を変更している。

²³ Gabriel Tarde: a.a.O., S. 3-4.

²⁴ タルドの社会理論におけるマスメディアをも含めたコミュニケーションの重要性については、モスコヴィッチの著作を参照のこと。Vgl. Serge Moscovici: Zeitalter der Massen. S. 233ff.

²⁵ Gabriel Tarde: a.a.O., S. 11.

²⁶ Vgl. Gustave Le bon: a.a.O., S. 103ff. ドイツ語訳 S.114ff.

表現」は、教会と国家である。²⁷そして、群集も組織集団もともに指導者を持つが、群集の指導者がいつも目につかず、ときには本当に指導者を持たない群集が生まれることもあるのにたいして²⁸、組織集団ではかならず指導者が前面に現れている。²⁹タルドによれば、組織集団は、原初の社会的結合である群集のうちから一連の中間段階を経て生じるのであり、社会はつねにこの両極のあいだで揺れ動くとされる。

タルドの理論は、一方では街頭に出現し、無媒介的に体験される集団としての可視的な群集にたいして、メディアや技術によって媒介された不可視の群集を対置し³⁰、他方では組織や階層秩序の解体现象そのものである群集の対極として、組織と階層秩序を具えた群集を概念化した。とりわけドイツの1920年代の群集論の展開を詳細に検討すると、そこには街頭を埋め尽くし社会的な組織を解体する革命的群集からメディアや交通および官僚組織などの合理的・技術的システムに深く浸透された群集へという群集概念の変容が見いだされる。前者の群集概念はエルンスト・トラウ、ティリヒ、ガイガー、ヘルマン・ブロッホなどに見いだされるものであり、後者の群集概念はハイデガー、クラカウアー、デーブリン、ヤスパース („Massenapparat“) に特徴的にみとれる。³¹このような事態を考慮すると、1920年代のドイツの群集論の展開は、いわばル・ボンの群集からタルド的な群集へのシフトとして特徴づけることが可能なのである。

3. ドイツ革命後の群集論と「古典的」群集心理学

すでに述べたように、ドイツの群集をめぐる言説は最初から革命的群集と密接に結びついていた。そして、このことはとりわけ、ドイツ革命とそれ続いて起こった一連の出来事の衝撃のもとで成立した1920年代中頃までの群集論に当てはまる。その代表的な事例としてここではテオドール・ガイガーの『群集とその行動』およびパウル・ティリヒの『群集と精神』を取り上げるが、ガイガーとテ

²⁷ Vgl. Gabriel Tarde: a.a.O., S. 167-169.

²⁸ Vgl. Gabriel Tarde: a.a.O., S. 176.

²⁹ Vgl. Gabriel Tarde: a.a.O., S. 170.

³⁰ 群集の可視性(および不可視性)とメディア技術の関係についてはつぎの論考を参照のこと。

Vgl. Susanne Lüdemann: Unsichtbare Massen. In: Masse und Medium. Verschiebungen in der Ordnung des Wissens und der Ort der Literatur 1800/2000. Hrsg. von Inge Münz-Koenen u. Wolfgang Schäffner, Berlin (Akademie Verlag), 2002, S. 81-91.

³¹ 本論ではこの問題の詳細な検討を行うことができないが、筆者はここで述べられた群集概念の変容を、別の場所で「革命的・忘我的大衆」から「技術的・合理的大衆」へのパラダイム・チェンジとして論じている。「〈交通〉と大衆－1920年代中期における大衆の言説の変容」(2005年10月1日、市大独文学会、大阪市立大学における口頭発表)を参照。また、とくに前者タイプの群集論についてはつぎの拙論を参照のこと。Takeshi Ebine: Ekstasis. Zum Massendiskurs in der Weimarer Republik. In: Neue Beiträge zur Germanistik 2004 Band 3, München (Iudicium), S.164-182.

テリヒが考察の第一の対象としたのはともに革命的群集であった。³²しかし、それら 1920 年代の群集論の根底にある群集体験の質がいかなるものであったのかをおそらく最も的確に表現しているのは、『群集と精神』が出版されたのと同じ年、1922 年にフランクフルトで遭遇した群集の体験を回想しながらカネッティが記したつぎの言葉であろう。「私にとって重要だったのは[・・・]、ある陶酔状態であり、体験の可能性の増大であり、自己の限界を抜け出て、同じように自己の限界を抜け出した人々のもとへ合流し、彼らとともにより高次の統一体を形成する個人(Person)の増大であった」。³³カネッティのこの言葉は、当時、「古典的」群集心理学の催眠術モデルにかわって群集体験のモデルとなった陶酔(Rausch)あるいは忘我(Ekstase)について語っている。じっさい、ガイガーは革命的群集の体験を「忘我的なリズム」で運動する群集のなかで個人の境界が溶解し去る体験と定義していたし、テリヒが同時代の群集のなかに見ていた「力動的群集」(dynamische Masse)は、彼によって「革命的かつ忘我的」とであると特徴づけられていた。³⁴しかし、ここで重要なのは、カネッティ自身がこの陶酔としての群集体験を「意識の完全な変容」³⁵と形容していることから明らかなおとおり、これらの群集論がル・ボンの理論を前提していることである。ル・ボンが「意識的人格の消滅、無意識的人格の優位、暗示と感染による感情と想念の同一方向への方向づけ、暗示された観念をただちに行動に移そうとする傾向」³⁶として特徴づけた同じ事象を、それらの群集論は、個体化原理を超えて高次の全体との合一にまでいたる自我の拡大の可能性の開示として理解しようとしたのである。言い換えれば、「古典的」群集心理学の催眠術モデルが群集体験を外部の視点から説明していたとするなら、それらの群集論が依拠する陶酔モデルは群集体験を内部から提示する。それゆえ、このようなモデルの置き換えは、主体としての群集の(再)発見と結びついている。そして、それは群集をもつばら客体と定義するル・ボンの理論の批判的な読解を要請することになる。1920 年代の群集論がいかにル・ボンの群集心理学を読みかえたのかを、以下テリヒとガイガーのテキストをもとに簡潔に考察してみたい。³⁷

³² Vgl. Takeshi Ebine: a.a.O., S.165-169.

³³ Elias Canetti: a.a.O., S.94.

³⁴ Vgl. Theodor Geiger: Masse und ihre Aktion. Ein Beitrag zur Soziologie der Revolution. Stuttgart (Verlag von Ferdinand Enke), 1926, S. 123. Paul Tillich: Masse und Geist. Studien zur Philosophie der Masse. In: Writings in Social Philosophy and Ethics. Berlin u. New York/Stuttgart (de Gruyter/ Evangelisches Verlagswerk), 1998, S. 55. 両テキストの該当箇所および忘我としての群集体験の分析としては拙論を参照のこと。Takeshi Ebine: a.a.O., S.165ff..

³⁵ Elias Canetti: a.a.O., S. 94.

³⁶ Gustave Le bon: a.a.O., S. 24. ドイツ語訳 S. 17.

³⁷ 20 世紀初頭から両大戦間期までのドイツにおける群集論の概観とイデオロギー分析として、つぎの論考を参照のこと。Vgl. Helmuth Berking: Mythos und Politik. Zur historischen Semantik des Massenbegriffs. In: Ästhetik und Kommunikation. Beiträge zur politischen Erziehung. Heft 55,

ティリヒがル・ボンの良き読者であったことは、群集の「形式的概念」についてつぎのように書いていることから明らかであろう。「形式的意味での群集とは諸個人の統合であるが、この統合の中で各個人は個人であることをやめる。諸個人の個別的形式は失われ、彼らはひとつの全体的形式に服すことになる。個人は原子となり、固有の質と独自の運動を奪われ、群集の運動に服従する単なる量となるのである。群集心理学を営むとは、いかに群集形式に没入した精神(Seele)が個別的な形式における精神と異なるのか、そして、群集の原子としての個人はいかに個的存在としての自分自身と矛盾することになるのかを確認することである」。³⁸このような心理的群集を、ティリヒはまた、「技術的・機械的群集」(technisch-mechanische Masse)と定義する。³⁹というのも、この群集は不定形で内的な秩序を欠いているがゆえに、外部から形式を押しつける技術的な操作に服従することになるからである。「精神的・社会的主体性の担い手にとって、機械的群集は客体＝対象であり、手段である。つまり、政治的支配の対象[・・・]、経済的支配の対象[・・・]、科学の対象[・・・]である」。⁴⁰したがって、一見したところ、ティリヒもまた、ル・ボンが強調した群集の客体的性格を受けれているようにみえるかもしれない。しかし、じつさいには、ティリヒにとって、「機械的群集は精神的・社会的統一の解体過程の直接の結果である」。⁴¹つまり、ティリヒは、「古典的」群集心理学が記述する群集の客体的性格を、群集の普遍的な本質としてではなく、歴史的かつ社会的に作り出されたひとつの存在様態として理解するのである。事実、ティリヒは一種の群集の類型学にもとづいて、機械的群集を「神秘的群集」(mystische Masse)に対置し、さらにその両者の移行形態として「力動的群集」を特徴づける。神秘的群集においては、ティリヒが「世界感情」と呼ぶ「統一的な原理」によって、内部から形式が生み出される。⁴²そして、ティリヒにとって革命的群集は、機械的群集の客体性を克服し神秘的群集へ移行しようとする力動的群集であった。この群集は、外から与えられ、みずからを客体の位置に押しやっていた歴史的・社会的な形式を破壊しつつ、みずから自己を組織し、新たな形式を模索する。そして、それゆえにティリヒは、そのような主体としての群集にふさわしい、まったく新しいタイプの指導者の概念を創造することになる。この指導者は、群集に内包されている統一的原理に表現を与えるためにのみ形式を用いるのであり、「与える以上に多くのものを受け取っているという意識に満たされた」指導者、群集の「支配者でも群集に善行を行う者でもなく、[・・・]群集に内包された真の形成への憧憬を啓示する者なのである」。

Jahrgang 15, Berlin, 1984, S. 35-40.

³⁸ Paul Tillich: a.a.O., S. 64.

³⁹ Paul Tillich: a.a.O., S. 50 u. S.67.

⁴⁰ Paul Tillich: a.a.O., S. 67. Vgl. Takeshi Ebine: : a.a.O., S.166-8.

⁴¹ Paul Tillich: a.a.O., 強調は筆者による。

⁴² Paul Tillich: a.a.O., S. 60.

ガイガーによるル・ボンの群集心理学の読みかえは、群集心理学による群集体験の分析をマルクス主義的社会分析と結びつけたことに存する。⁴⁴そのさい、ガイガーはふたつの群集概念を区別する。ひとつは「革命的群集」を意味する単数形の *Masse* であり、他方はガイガーによって「プロレタリアート」と呼ばれる複数形の *Massen* である。周知のように、ル・ボンは群集をその構成要素の異質性によって特徴づけており、それは均質的な労働者階級としてのプロレタリアートではなかった。ル・ボンを批判的に受容するガイガーは、マルクス主義的なプロレタリアート概念を修正する。ガイガーによれば、*Massen* としてのプロレタリアートは、社会を統合する価値のシステムの崩壊と形骸化によって生じた社会の機械化の所産である。⁴⁵それはティリヒが「技術的・機械的群集」と呼んだものであり、「機械化され、(もっとも広い意味での)指揮 (*Führung*) の客体=対象へと貶められた大勢の人間あるいは下層の人々」のことである。⁴⁶この意味でのプロレタリアートは、多様な組織に属しており、「単一のグループとしては存在しない」⁴⁷。ガイガーは、ル・ボンの群集の異質性の理論を、マルクス主義的なプロレタリアート概念の厳密化として読み直す。「プロレタリアートのうちには多様な段階に分かれた階層化が存在する。プロレタリア化の度合いには、多くの段階があるのだ。機械工場の金属加工労働者と(ルンペンプロレタリアート)とのあいだには深淵が開いている」。⁴⁸そのような *Massen* を構成する人々に共通するのは、彼らが感じている、政治的・経済的・文化的に「搾取され、権利を奪われた存在であるという運命」とそれを強いる秩序に対する「内なる反抗心」⁴⁹だけである。したがって、この *Massen* は不可避免的に、文士やボヘミアンなどの「主観的プロレタリアート」とともに、支配的な秩序に抵抗する知識人や学生などをも含むことになる。⁵⁰ガイガーはこのようにして、純粋な客体と定義されたル・ボンの群集を、社会的状況の所産として捉え直すのである。

それにたいして革命的群集としての *Masse* は、いま述べた *Massen* を構成する諸個人の抱く社会秩序への反発が、ひとつの集団的な否定的意志に変容することによって出現する。「苦痛の状態から、苦しみたくないという力動性が解き放たれる」。⁵¹言い換えれば、「権利を奪われた者たち

⁴³ Paul Tillich: a.a.O., S. 55.

⁴⁴ Vgl. E. Pankoke, a.a.O., S. 830. u. Johannes Chr. Papalekas: a.a.O. S. 223-4.

⁴⁵ Theodor Geiger: a.a.O., S. 38ff.

⁴⁶ Theodor Geiger: a.a.O., S. 44.

⁴⁷ Theodor Geiger: a.a.O.,

⁴⁸ Theodor Geiger: a.a.O., S. 93.

⁴⁹ Theodor Geiger: a.a.O., S. 45.

⁵⁰ Vgl. Theodor Geiger: a.a.O., S. 91ff.

⁵¹ Theodor Geiger: a.a.O., S. 73.

の憎しみが、個人的・主観的な感情の領域を離れ、集団的な志向性に急変する」⁵²のである。Massen を構成した異質な諸個人は、この集団的な志向性、つまり、既存の社会秩序に対する否定的意志において、均質化する。「群集体験のなかに個人の意識は没し去る。完全な均質化、**自我の我々への統合**が起こるのである」。⁵³このような説明のなかに、私たちは群集のなかでの個人の変容についてのル・ボンの命題のラディカルな読みかえを見ることができる。なぜなら、ガイガーはル・ボンの群集体験の記述を換骨奪胎することで、権力の客体の地位に甘んじていた群集が行動の主体(„Wir“)となるメカニズムを理論的に考察しようと試みているからである。ガイガーにとって、革命的群集は「行動の内的な力動性」によって特徴づけられる。「運動する群集は、それ自体として内的な活動状態にある。[・・・]群集の活動は、攻撃的なものであり、街頭の人だかりのように反撥的ではない」。⁵⁴そして、ガイガーにとっても、群集は指導者と切り離すことの出来ないものであった。しかし、行動の主体となった革命的群集の指導者は、ル・ボンのそれと同じではありえない。したがって、ガイガーは「忘我的指導者」とでも呼ぶべきタイプを、冷静に群集を操る扇動者に対置することになる。「典型的な指導者は、群集にたいしてひとつの方向にむけて影響を及ぼしたりすることは全くない。そうではなく、指導者は[群集のうちに]基本的な方向を見いだすのである。[・・・]典型的な指導者は、冷静に群集を特定の方向に導く〈扇動者〉ではなく、群集体験の忘我状態によってもっとも強くとらえられている者であり、最も意識を失っているもののひとりなのだ」⁵⁵。

ドイツ革命のインパクトのもとで成立した 1920 年代前半の群集論は、「古典的」群集心理学の催眠術モデルに代えて、陶醉・忘却を群集体験の根底に見出した。そして、それは群集をその内的な生において、言い換えれば、その主体性において考察することを要請した。しかし、それが群集体験の理論である限りにおいて、1920 年代の群集論は「古典的」群集心理学の拒否にではなく、そのラディカルな読みかえにもとづいている。そのさい一方では、私たちがテレビとガイガーにおいて確認したように、「古典的」群集心理学によって定式化された群集の客体的性格が、永遠の本質ではなく、ある歴史的・社会的状況の結果として捉え直されることになる。そして他方では、まさに群集が主体として承認されたがゆえに、1920 年代の群集論では、群集と権力の問題—すなわち指導者の問題—の先鋭化が生じ、指導者の新たな概念が模索されることになったのである。

⁵² Theodor Geiger: a.a.O., S. 73-4.

⁵³ Theodor Geiger: a.a.O., S. 123. 強調原文。

⁵⁴ Theodor Geiger: a.a.O., S. 35-6.

⁵⁵ Theodor Geiger: a.a.O., S. 149.

4. 革命的群集心理学とフロイト

前章では、ル・ボンの「古典的」群集心理学が、1920年代中頃までに哲学者や社会学者の群集論のなかでどのように受容されたのかを考察したが、同じ時期に二人の精神分析学者によって群集心理学自体もまた革新されることになる。そのひとりにはフロイトの友人であり弟子でもあったパウル・フェーデルンであり、もうひとりにはフロイト自身である。どちらも人間社会の起源についての共通の仮説に依拠しながらも、そこから引き出された結論は対極的である。ここでは、すでに考察した1920年代の群集論の諸特徴を考慮しつつ、二つの群集心理学を簡潔に特徴づけてみたい。

『革命の心理学について：父なき社会』と題されたパウル・フェーデルンのテキストは、1919年3月にウィーンで開催された精神分析学の会合での講演にもとづいている。テキストの内容を考えると、この日付は重要である。1918年11月のドイツ革命後、ロシアのモデルにしたがって、ドイツ各地に（そしてオーストリアやハンガリーにも）革命評議会（Räte）が設立される。そして、1919年1月にはベルリンで、ゼネストとスパルタクス団の蜂起が起こる。これ以後、革命評議会設立の動きがますます広がりを見せることになる一方で、それに対抗する政府や右派勢力の動きも激しさを増していった。⁵⁶フェーデルンは、このようなアクチュアルな状況を群集心理学によって分析しようと試みるのである。⁵⁷「私たちはこれから二つの特徴的な現象、すなわち革命評議会組織とストライキを心理学的に説明することを試みてみたい。それらは、各個人の心的過程が同じ方向に累積する場合にのみ心的過程による説明が可能になる群集現象である。すべての労働者は似たような内的動揺と同じ種類の反応を体験したに違いない。おそらく、共通の内的な支えが失われてしまったのだ」。⁵⁸

ここで「共通の内的な支え」と呼ばれているもの、つまり、諸個人を社会秩序のなかに組み込む心理的諸力の核心を、フェーデルンは、「すべての法的なもの、指図されたもの、権威あるものになりたいする畏怖」⁵⁹のうちに見出す。したがって、もしいまやそのような権威への畏怖が失われたとするなら、その原因を明らかにするために、逆にそれがいかにしていままで維持されてきたのかを解明する必要がある。フェーデルンが構想した政治的群集心理学の問題設定がもっとも鮮明になるのは、まさにこの点においてである。なぜなら、ここでフェーデルンは、群集の権力への服従という

⁵⁶ Vgl. Hans Mommsen: *Aufstieg und Untergang der Republik von Weimar 1918-1933*. München (Econ Ullstein GmbH & Co. KG), 2001, S. 35-72.

⁵⁷ このテキストの社会的背景については、つぎの文章を参照のこと。Helmut Dahmer: *Auf dem Weg zu einer analytischen Sozialpsychologie*. In: *Analytische Sozialpsychologie*. Bd. 2, hrsg. von Helmut Dahmer. Frankfurt am Main (Suhrkamp), 1980, S. 686-7.

⁵⁸ Paul Federn: *Zur Psychologie der Revolution: Die vaterlose Gesellschaft*. In: *Analytische Sozialpsychologie*. Bd. 1, hrsg. von Helmut Dahmer. S. 67.

⁵⁹ Paul Federn: a.a.O., S. 68.

問題について「古典的」群集心理学が提供する答えの不十分さを指摘しつつ、群集心理学の問いを別の形で立て直すからである。「群居本能、模倣、暗示は、あらゆる種類の共同生活の基礎にある、未分化かつ根源的な心的諸力である。しかし、私たちが問うのは、人々を結びつけるそれらの一般的な補助手段が、どのような仕方で、特にこれまでの資本主義的な君主制国家において用いられてきたか、ということである」。⁶⁰フェーデルンの革命的群集心理学は、「古典的」群集心理学が記述する群集化した個人の心的メカニズムと社会的な支配システムとの関係を問うことによって、群集心理学を政治化する。フェーデルンは、群居本能がいかに社会的に組織されるのか、模倣や暗示によっていかなる依存関係が伝播し、いかなる支配関係が社会的に再生産されるのかを問うのである。そのとき心的メカニズムと支配システムとを媒介する場として、父権的社会の家族が、特にそこでの父親と息子との関係が「権威への尊敬の基盤」として注目されることになる。⁶¹フロイトのエディプスコンプレックスの理論に依拠しつつ、フェーデルンはいかに子供にとって父親が権威的存在となるのか、そして、子供が成長するにつれてその父親の権威がどのようにして社会の多くの存在に、そしてついには様々な公的な諸機関と国家権力に転移されていくのかを分析していく。「原初の強烈さを保ったまま、後の社会への順応のさいにも息子としての感情が密かに持続することが、こうして、社会を国家と結びつける力の巨大で秘められた源泉の条件となっている」⁶²とフェーデルンは結論づけている。

フェーデルンによれば、帝政の崩壊によって国家的秩序にたいする畏怖が失われ、それによって、父権的秩序に服従する息子的な感情と態度もまた解体することとなった。したがって、この父権的秩序の崩壊を導いた革命的群集の運動が、みずから革命評議会を組織するとき、それは父権的秩序の再建ではなく、別の社会秩序、すなわち「父なき社会」(die vaterlose Gesellschaft)を実現せんとする試みであるはずだとフェーデルンは指摘する。「新たな組織が自動的に成立しなければならなかったほどに、古い父権的なものからの最終的解放を求める欲求は強かった。この新たな組織は、同じ権利を持つすべての兄弟たちから構成されている。これまでの諸組織はすべて、指導者を中心に組織されていた。(…)新たな組織—つまり革命評議会の組織—は、群集のなかから、社会の底辺から成長してきた。この組織は底辺から刺激を受け取るものであり、その不可視の心理学的システムは兄弟関係なのである」。⁶³ここでフェーデルンが提示する父権的な秩序から「父なき」兄弟的な秩序への移行という図式の起源は、フロイトの『トーテムとタブー』にある。

⁶⁰ Paul Federn: a.a.O., S. 68.

⁶¹ Paul Federn: a.a.O., S. 68. Vgl. auch Serge Moscovici: a.a.O. S.296.

⁶² Paul Federn: a.a.O., S. 71.

⁶³ Paul Federn: a.a.O., S. 76.

「父なき社会」もまた、フロイトが同書の第四章で用いた概念である。⁶⁴フロイトはそこで、当時世界中に見られる普遍的な現象であるとみなされていたトーテミズムの起源をエディプス的の二律背反(父殺しと罪の意識による父の神格化)から説明することによって、エディプスコンプレックスの仮説を人間文化一般の成立過程を説明する普遍的原理として定式化しようとしたのであった。⁶⁵そのさいフロイトは、原初の社会を *Urvater* が専制的に息子たちを支配する集団 *Urhorde* とし、そのような父の殺害によって、一時的に「父なき社会」が成立するとした。しかし、フロイトによれば、この「父なき社会」は父の神格化とともに「父権的社会」へ変容する。⁶⁶フェーデルンにとって、ドイツ革命とはこの原始社会における父殺しの反復以外のなにものでもない。⁶⁷フェーデルンの分析にしたがえば、革命評議会という形で自己を組織した革命的群集は、*Urvater* の代理であった父権的権力を打倒することで父権的社会から「父なき社会」への移行を成し遂げようとするのであり、*Urvater* を殺害した兄弟の集団の回帰なのである。

フェーデルンの講演がウィーンでなされてからわずか 2 年後、フロイトは『群集心理学と自我分析』を発表する。この論文もまた「古典的」群集心理学に重要な革新をもたらしたが、1920 年代の群集論と群集心理学を考察してきた私たちにとって特に興味深いのは、フロイトのテキストと本論で考察された群集をめぐる諸言説とのあいだの差異である。ただし、その差異は、ある共有された問題についての見解の相違というような、論争を形成する性質のものではない。フロイトのテキストは、あたかも問題の存在それ自体の否認であるかのように読めるのである。ここではこの点に注目しつつ、フロイトの考察がル・ボンの群集心理学にたいして行った三つの理論的修正をもとに、フロイトの群集心理学の特徴をごく簡潔に指摘してみたい。⁶⁸

第一にフロイトは、個人心理学と群集心理学との対立を相対化する。すでに確認したように、ル・ボンは、心理的群集はそれを構成する諸個人の心的性質とはまったく異なる性質を示すと主張することによって、個人と群集との対立を絶対化した。フロイトは、この群集心理学に固有の命題を、いわば数の神秘主義として批判する。「数という要素にそれほどまでに大きな意味を認め

⁶⁴ Vgl. Sigmund Freud: Totem und Tabu. Einige Übereinstimmungen im Seelenleben der Wilden und der Neurotiker. In: Sigmund Freud: Studienausgabe Bd. IX, Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag), 1974, S.432.

⁶⁵ いわゆる「トーテミズム体系」(totemistisches System)とフロイトのトーテミズム解釈についてはレヴィ=ストロースの批判を参照のこと。Vgl. Claude Lévi-Strauss: Das Ende des Totemismus. Frankfurt a. M. (Suhrkamp), 1965, S.75ff. u. bes. S.91-2.

⁶⁶ Vgl. Sigmund Freud: Totem und Tabu. S. 424ff.

⁶⁷ Paul Federn: a.a.O., S.80.

⁶⁸ フロイトの群集心理学の詳細な分析としてつぎの著作を参照のこと。Vgl. Serge Moscovici: Zeitlater der Massen. S. 277-359. Helmut Dahmer: Psychoanalyse als Gesellschaftstheorie. In: Analytische Sozialpsychologie. Bd. 1. S. 9-28..

るのは、私たちにとって困難である」。⁶⁹また他方では、個人心理学は個人をそれが属する人間集団、とりわけ家族との関係において分析する以上、つねに幾分かは群集心理学を含んでいるはずである。それゆえ、フロイトは、それ以上分解不能な独立した心理学的単位であるとされる「群集の心」(Massenseele)の仮説を受け入れることを拒否し、群集が示す新しい特性と見えるものは、実際には群集化した個人の無意識に由来するものであると主張する。「個人は群集のなかで、自己の無意識的衝動にたいする抑圧を捨て去ることが可能になるような諸条件のもとに身を置くのだといえ、私たちにとって十分である」。⁷⁰したがって、のちに確認するように、フロイトは群集現象に固有の次元を認めず、それを個人間の関係に還元することになる。

ちなみに、「群集の心」にたいするフロイトの批判は、「古典的」群集心理学のもうひとりの代表者であるタルドがすでに行っていた批判の変奏である。タルドは『世論と群集』の序文において、個人精神から独立した集団精神という仮説を神秘主義的錯誤として退けている。⁷¹しかし、フロイトの群集心理学におけるタルドの隠れた影響⁷²がもっとも鮮明になるのは、考察対象とする群集の選択においてである。そして、これが理論的修正の第二点である。つまり、フロイトは、ル・ボンの考察の主な対象であった「一過性の関心にもとづいて異質な諸個人の集まりとして素早く形成される短命な群集」⁷³に代えて、「高度に組織化され、持続的な、人工的群集」⁷⁴を分析の対象に選ぶのである。フロイトは「自然的群集」を定義していないが、それを恒常的な組織性を欠いた自然発生的群集として理解してよいならば、ここでフロイトが依拠している概念的区分は、タルドによる群集と組織集団との区別に正確に一致する。そして、フロイトがじっさいに考察の出発点として用いたのは、タルドが組織集団の代表例としてあげていた軍隊と教会であった。フロイトの群集心理学は、指導者と階層秩序を持つ組織集団の心理学なのである。

最後に、フロイトはまた、諸個人の群集化のメカニズムを説明する原理として、「古典的」群集心理学が依拠していた暗示の代わりに、リビドーを導入する。そして、群集化した諸個人の間をリビドー的結びつきとして分析することによって、フロイトは、すでにル・ボンが証明することなく主張

⁶⁹ Sigmund Freud: Massenpsychologie und Ich-Analyse. In: Sigmund Freud: Studienausgabe Bd. IX, Frankfurt a. M. (S. Fischer Verlag), 1974, S.66.

⁷⁰ Sigmund Freud: Massenpsychologie und Ich-Analyse. S. 69.

⁷¹ Vgl. Gabriel Tarde: a.a.O., S.V. 「集団心理学とか社会心理学という表現は、取り除くにこしたことはない妄想めいた考えだと理解されている。その考えの核心は、集団精神や社会意識や我々(nous)が個人精神の外に、あるいはそれを超えたところに存在すると考えることにある。私たちの見方によれば、通常心理学と社会心理学[・・・]とのあいだに明快な境界線を引くために、そのような神秘的概念を用いる必要は全くない」。

⁷² Vgl. auch Serge Moscovici: a.a.O., S. 281.

⁷³ Sigmund Freud Massenpsychologie und Ich-Analyse. S. 78.

⁷⁴ Sigmund Freud: Massenpsychologie und Ich-Analyse. S. 88.

していた指導者と群集との必然的な関係(「指導者なくして群集なし」)をより厳密に基礎づけることになる。このリビドー論的分析において、フロイトが(人工的)群集のなかに作用しているのを見出したのは、群集のなかの諸個人相互の同一化(Identifizierung)と指導者への惚れ込み(Verliebtheit)という二重の関係であった。同一化とはリビドーの対象の自我への取り込みであり、対象を自我の位置に置くことになるのにたいして、惚れ込みとは対象を経由したナルシズムの充足であり、対象は自我理想の座を占めることになる。群集のなかで諸個人の思考や感情の同質化が起こるのは同一化の結果であるが、群集の根底をなすのは各個人の指導者への惚れ込みである。なぜなら、各個人はまさにこの指導者にたいする関係の共通性において相互に同一化するからである。⁷⁵各個人の指導者への惚れ込みが群集化の条件なのである。それゆえフロイトは、「古典的」群集心理学の催眠術モデルを再び取り上げ、催眠術師と技術者の関係を指導者への惚れ込みの関係と同一のものとみなし、催眠術を「二人での群集形成」⁷⁶と呼ぶことになる。群集現象は、フロイトにとって、二人の人間のあいだの権力関係に還元されうるものなのである。

フロイトがル・ボンの群集心理学にたいして行ったこれらの理論的修正は、最終的にただひとつの理論上の決断に帰着するように見える。すなわち、同時代の群集をめぐる思考を支配していた革命的群集の完全な否認である。⁷⁷以下三つの点において、この否認を確認しておきたい。

カネッティはすでに言及された自伝のなかで、1925年の夏、フロイトのテキストを読んだ時のことを回想しながら、「私にとってフロイトの論文に欠けていたのは、なによりもまず、[群集という]現象の承認であった。」⁷⁸と書いている。1921年の群集をめぐる思考において避けて通れぬ現象が何かあったとしたら、それは革命的群集であったろう。ところが、フロイトは、タルドに由来すると思われる概念区分にもとづいて対象を「人工的群集」に限定することによって、革命的群集をあらかじめ視界から一掃しているのである。つぎに、主体としての群集の可能性を探求した同時代の群集論とは対照的に、フロイトの考察において、群集の客体的性格がよりラディカルに、理論的に根拠づけられた。フロイトにとって、群集のなかで作用する二重のリビドー関係は、『トーテムとタブー』で論じられた原初の共同体 *Urhorde* を支配していたものであった。「群集の指導者はいまなお、かつて恐れられた *Urvater* であり、群集はいまだに際限のない暴力によって支配されたいと欲してい

⁷⁵ Vgl. Sigmund Freud: *Massenpsychologie und Ich-Analyse*. S. 98-108.

⁷⁶ Sigmund Freud: *Massenpsychologie und Ich-Analyse*. S. 107.

⁷⁷ ここで論じられている論文で、フロイトはただ一度だけ「革命的群集」に言及している。Vgl. Sigmund Freud: *Massenpsychologie und Ich-Analyse*. S. 78. Vgl. auch Annette Graczyk: a.a.O., S. 26.

⁷⁸ Elias Canetti: a.a.O., S. 169.

るのだ」。⁷⁹群集を Urhorde の回帰とみなす理論において、群集の主体性は、支配の客体であることを欲する主体という逆説的な形象によって否認される。最後に、フロイトは、パウル・フェーデルンが遂行した群集心理学(および精神分析学)の政治化を拒否する。フェーデルンが、群集化した個人の心的メカニズムを歴史的に成立した社会の支配システムと結びつけたのにたいして、フロイトは、ル・ボンがすでに行っていた一般化をさらに押し進める。なぜならいまや群集の性質は、エディプスコンプレックスにもとづく普遍的とみなされた文化理論によって説明されるからである。

80

5. 結語

ヨハネス・Chr・パパレカスによれば、「〈文化の破壊者〉としての群集にたいするル・ボンの非難は、いわば、近代社会が生み出す高度の緊張関係をコントロールできない市民階級の無力に対する抗議であった」。⁸¹みずからも市民階級の出身である著者による、いわば自分という存在を生み出した社会的進歩の所産—それが群集である—への批判は、19世紀末以降のヨーロッパにきわめて広範に見出される文化批判の基本的図式といつてよいだろう。じっさい、ドイツにおいても—とりわけドイツにおいて—ジンメルからシュペンングラーを経てヤスパースにいたる群集論の流れは、文化批判的群集論の系譜を形作っている。しかし、ドイツ革命後から1920年代の中頃までにドイツとオーストリアで成立した群集をめぐる言説の考察によって、本論が示そうとしたのは、この文化批判的ないし貴族主義的系譜には収まらない群集をめぐる思考の存在であった。この限られた一時期に生み出された群集論と群集心理学は、「古典的」群集心理学をいわばその「毛並みに逆らつて」受容し、読みかえたのである。そのような受容と読みかえによって、群集体験の陶醉モデル、行動の主体としての群集、群集を一方向的に支配する存在ではない指導者の概念が練り上げられ、群集心理学の歴史化と政治化が試みられた。これらの諸要素こそが、本論が考察した言説の特異性である。そして、フロイトの群集心理学は、これら同時代の言説へのラディカルな理論的返答として理解することができる。私たちは、フロイトと他の著者たちとのこの徹底的なすれ違いのうちに、この歴史的な一時期に展開した群集・権力・言説のあいだの激しいせめぎ合いをみてとることができるだろう。

⁷⁹ Sigmund Freud: Massenpsychologie und Ich-Analyse. S.119. 強調は筆者による。

⁸⁰ 後年、アドルノはファシズム・プロパガンダの分析において、フロイトの群集心理学を再びとりあげ、それを歴史的・社会的状況の分析と結びつけることを試みている。Vgl. Theodor W. Adorno: Die Freudsche Theorie und die Struktur der faschistischen Propaganda. In: Gesammelte Schriften, Bd. 8. Hrsg. von Rolf Tiedemann, Frankfurt, 1972, S. 408-433.

⁸¹ Johannes Chr. Papalekas: a.a.O., S.223.